

ラグビーワールドカップ 2019 国際映像制作のスキーム

廣谷 徹 Hiroya Toru

Keywords : スポーツ中継 ラグビーW杯 4K 高精細映像 ホストブロードキャスター

1 目的

2018年12月からNHKや日本テレビ系列を除く民放系列、東北新社、スカパー！など9社が新4K8K衛星放送を開始し、2019年9月1日にはBS日テレも開局して、4K8K時代が本格的に始まった。高精細、高音質を掲げる4K8Kチャンネルのキラーコンテンツは、スポーツ中継である。その中でも9月20日に日本で初めて開催されるラグビーワールドカップ2019日本大会の4Kへの取り組みは注目を浴びている。今年の日本大会では、全48試合をすべて4Kシグナルで映像中継を実施、ライセンスホルダーに4Kシグナルで配信する。ラグビーW杯としては史上初である。スポーツ中継も本格的に4K時代に突入した。本稿では、ラグビーワールドカップ2019大会の国際映像（ホスト映像）4K制作のスキームを検証する。

2 方法

ラグビーワールドカップ2019日本大会のホストブロードキャスターIGBS（International Games Broadcast Services）は、初めて国際映像（ホスト映像）制作を担当する。本稿では、IGBSのProject DirectorへのインタビューやIGBSからの資料提供、ラグビーワールドカップ2019組織委員会からの資料提供を元に分析する。

3 調査・分析の結果

全48試合を4K中継を達成するためには、全国12カ所のスタジアムに4K中継システムを配備し、12カ所のスタジアムと東京・調布に建設したIBC（International Broadcasting Center）と高速光ファiberで結ぶ必要がある。ラグビーW杯組織委員会では、通信インフラの整備に多額の投資を行う必要があった。通信インフラの整備が4K時代には肝要になる。

また高精細画質の小型カメラやスパーダーカメラなどの特殊カメラ、スロー再生装置がスポーツ中継には必須だが、今回ようやく可能になった。機材開発も4K時代の今後の課題となる。

4 結論

新4K8K放送を定着するためには、4K8Kの魅力的なコンテンツ開発が極めて重要である。

来年は2020東京五輪大会、4K8Kが五輪史上初めて全面に出てくるのは確実な中で、この1年で機材開発、通信インフラの整備を官民一体でさらに進め、すべての競技で、高精細、高音質の放送を実現して、2020東京五輪大会のレガシーにしなければならない。

【主要参考文献】

IGBS Rugby World Cup 2019

ラグビーワールドカップ2019組織委員会 Fact Book

OBS Media Fact File

World Rugby YEAR IN REVIEW

月刊ニューメディア 「RWC2019日本大会 9月に開幕 IGBSが初の全試合4K中継制作」

2019年7月

【報告要旨作成における注意事項】

- A4 判 1 ページ以内におさめること
- 上下左右の余白は 20mm
- 題目は MS 明朝 14 ポイント、副題目は MS 明朝 12 ポイントで中央寄せ
- 氏名は MS 明朝 11 ポイント（共同研究者がいる場合は、当日の発表者の氏名に○をつけること
- 本文は 1,000～1,400 字程度とし、原則として MS 明朝 11 ポイント